

日本道徳教育学会神奈川支部 令和5年度研究テーマ及び趣旨設定

道徳科における個別最適な学び、協働的な学びの実現を目指して

～一人一人が主体的にかかわる道徳科授業～

令和3年1月の中教審答申において、これからの教育の在り方として示された「令和の日本型学校教育」には、その実現すべき学習の姿として「個別最適な学びと、協働的な学び」がキーワードとして示された。本支部では、このことから令和4年度の研究テーマを「道徳科における個別最適な学び、協働的な学びの実現を目指して」と設定し、具現化を進めてきた。これまで、一定の成果は得られたものの、まだ、研究が十分ではないとの考えから、今年度も、昨年度の実績の基に新たにサブテーマ「一人一人が主体的にかかわる道徳科授業」を付記し、さらに研究を深めることとした。

「個別最適な学び」とは、これまでの「個に応じた指導」を学習者の視点から整理したものである。このことは、学習を「指導」という教師の立場で捉えることから、「学び」の主体である児童生徒の立場で捉えていくことへの転換を図ったものである。また、「個別最適な学び」が「孤立した学び」にならないように、児童生徒同士や多様な他者と協働しながら学習を進めていくことの重要性も対で指摘されており、共に学ぶという学習者の姿勢が求められている。このように、「個別最適な学びと、協働的な学び」を実現していくためには、児童生徒が自らの学習を調整していく主体性が重要になってくる。この児童生徒の学習に対する主体性を育てていくためには教師の働きかけが重要であることは言を俟たないことである。教師は明確な意図やねらいを持って授業を構成し、その構想の下に授業を行っている。そして、このような授業展開の中で児童生徒との相互作用を通じて、学習に対する主体性が形成されていくと思われる。

道徳科の目標は、あくまでも道徳性の育成にある。道徳性の育成は道徳的価値を押し付けられて育まれるものでなく、自らの能動的な関わりの中で納得していくことで育まれていくものである。この意味において、道徳科で「個別最適な学びと協働的な学び」の実現、つまり、児童生徒の主体的な学習展開が重要なのである。教師の押し付け的な指導ではなく、児童生徒が主体的に関わり、他者と協働していく中で、いわば、児童生徒とともに作り上げていく授業が求められているといえるであろう。このような授業においてこそ道徳性は育まれていくと考えられる。

一方で、GIGA スクール構想の基に、児童生徒一人一人にコンピューターが整備され、一人一台端末の利用の学習が日常となった。もちろん、各教科と同様に道徳科においても ICT の有効な活用が求められている。この一人一台端末を生かし、研究テーマの実現に向け ICT を活用していきたい。ただ、ここで留意しなければならないことは、ICT の活用はあくまでも手段であり目的ではないことである。あくまでも、「個別最適な学び、協働的な学び」や「主体性を育む」ことを念頭に置きたい。

以上のような課題意識の下、道徳性を育むために、道徳科における個別最適な学び、協働的な学びの実現を目指して、さらに深めたいと考え本研究主題を設定することにした。